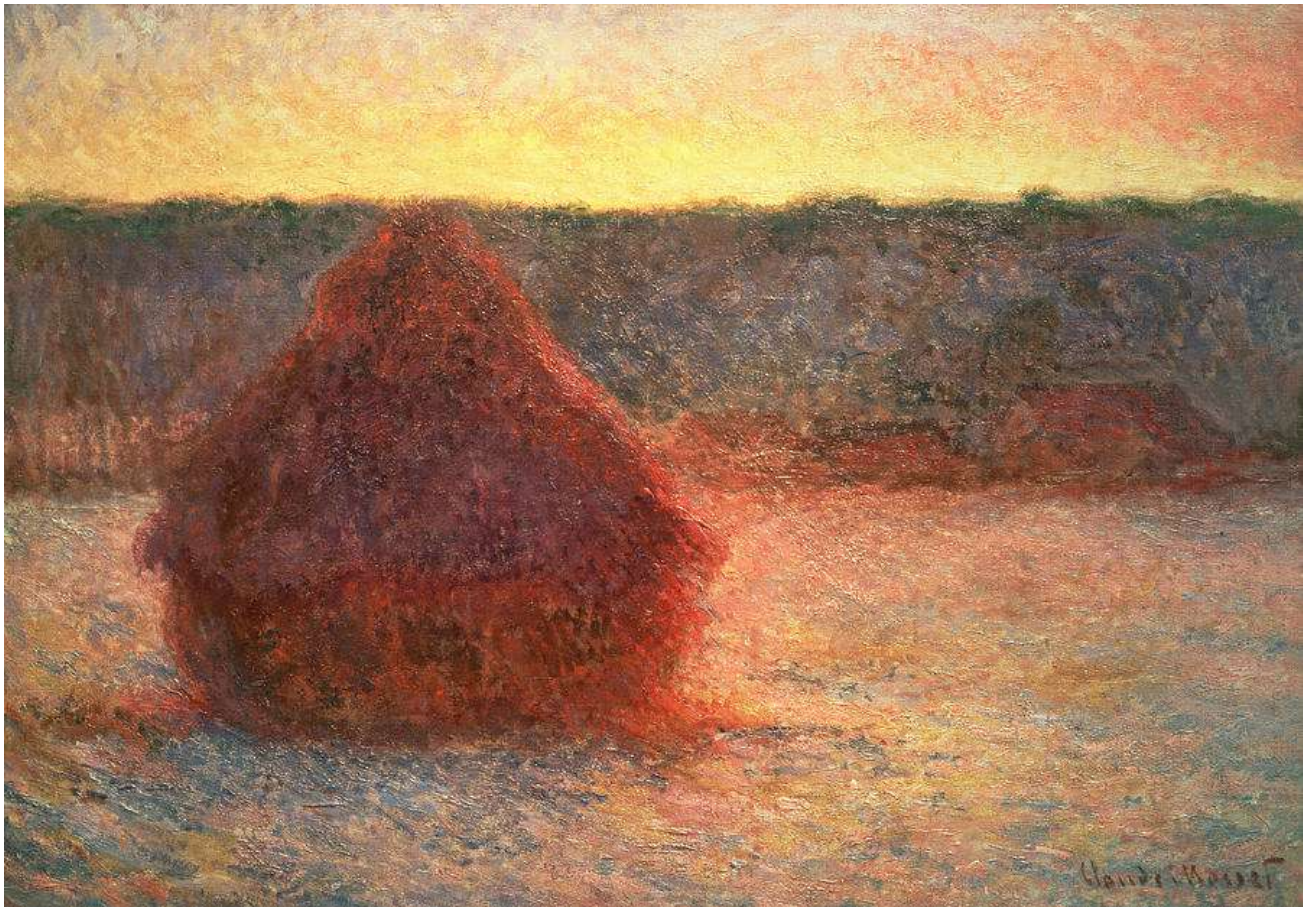
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 175

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

3481. ある卒業式に参加する夢

3482. 夢の補足と夢の続き

3483. 作曲ノートを読み返す習慣

3484. メルヴィンの新しい店を訪れて

3485. 子犬を探し、詩集を購入する夢

3486. 豊かさを増す夢の世界と閾値

3487. ヘリコプターで世界中を巡る夢

3488. 霧立ち込めるある日の午後より

3489. 人生のある一日

3490. 親切心に溢れる夢

3491. 救急車に乗り、公民館で講演する夢

3492. 形容詞を述べるゲームと地球の外で生まれた女性に関する夢

3493. 理論という集合的叡智

3494. 今朝方の夢

3495. 内在する賢明さと完全さを示唆する夢

3496. 小雨降り続ける土曜日に

3497. 土曜日の夜より

3498. 中世の城に宿泊する夢

3499. 丘の上のスピーチと不思議な赤ちゃん

3500. 父に似た歴史上の人物と幸福の香り

© YOHEI KATO 2018

3481. ある卒業式に参加する夢

今朝は午前三時半に一度目を覚ましたが、実際に起床したのは五時半過ぎであった。今日もゆっくりと一日の活動を始めていこうと思う。

今日は午後から、かかりつけの美容師のメルヴィンが新たにオープンした店に初めて訪れる。これまでの店よりもさらに街の中心に近い場所にその店はある。ちょうど大きな教会の裏手側の道沿いにメルヴィンの新たな店がある。内装にも随分とこだわり、置いてあるものにも随分とこだわったそうであるから、本日美容院を訪れることが今から楽しみだ。

いつものように今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、アメリカのどこかの大学院に所属していて、そこで勉強を続けていた。何の勉強をしていたのか定かではないが、おそらく教育関係の勉強だと思う。私は、様々なクラスが開講される建物の中にいた。実際には、ある部屋の中にいたのだが、そこは教室というよりも、どこか日本の旅館の和室のように思えた。その部屋には畳が敷かれており、部屋の真ん中に、脚の低いテーブルが置かれていた。

窓側の壁にはヒーターが取り付けられており、私はそのそばで温まっていた。窓の外を見ると、そこには美しい雪景色が広がっていた。ひらひらと雪が舞い、地面には積もった雪の姿が見える。私はしばらく、真っ白な雪景色をぼんやりと眺めていた。

満足のいくまで雪景色を眺めた後、私はその部屋を後にし、クラスに参加するために教室に向かった。私はこの建物にまだ慣れていないためか、教室の場所がすぐにわからなかった。

先ほど自分がいた和室とは雰囲気が一変し、廊下を含めて雰囲気は欧米風である。ちょうど廊下をある教授が通りかかったため、私はその教授に教室の場所を尋ねた。その教授は親切に場所を教えてくれたのだが、彼は「あと二分で教室の扉は閉まってしまうよ」と述べていた。それを聞き、私は慌てて教室に向かった。

しかし、なぜだか私は、教室の場所を教えてもらったにもかかわらず、そこからさらに迷ってしまい、建物の一階のスペースに出てきてしまった。見るとそこは、学生たちがくつろげる場所になっており、多くの学生が談笑していた。一方、その傍らにはコンピュータールームがあり、ガラス越しに中の様

子を眺めると、そこでプログラミングに励む学生たちの姿を見かけた。談笑している学生の中に、日本人が一人いて、見ると、あまり話したことはないのだが、小中学校時代の知り合いであった。彼は親切にも、「教室はあっちだよ」と私に教えてくれた。だがその前に、私はこの建物から外に出て、どこか別の場所に行く必要があるような気がしていた。

私の心は教室に行くことではなく、そのよくわからない場所に行くことにあった。建物の一階の窓越しから外を眺めると、相変わらず雪が降っている。その雪を眺めながら、「外は随分寒そうだぞ」と私は思った。いざ今から外に出て行こうとしたところで、足元を見ると、なんと靴を履いておらず、靴下だけを履いているような状態であった。「これでは外を歩くことはできない。何よりも、靴下が汚れてしまう」と私は思った。そこでやはり本来の目的である教室に向かうことにした。

先ほどすれ違った教授が、「あと二分で教室の扉がしまってしまう」と述べてから、すでに二分以上が経過していると思ったが、私はダメ元で教室に向かった。すると、教室の扉は開いており、中の様子を覗いてみると、まだ授業は始まっていなかった。それどころか、学生もまだほとんど来ておらず、数名の学生が教室の後ろで飲み食いしながら立ち話をしていた。授業に間に合ったことにホッとした私は、彼らの輪の中に入り、会話を楽しんだ。

しばらくすると、一人の教授が入ってきて、扉を閉めた。その教授が話をし始めると、これから始まるのは授業ではなく、大学院の卒業式のようだった。その教授が「今から卒業式を始めましょう」と述べると、教室の形が突然自動で変わっていき、幾分薄暗く、厳かな雰囲気を持つ部屋に変わった。そこには壇上があって、教授や学生がスピーチできるような形になっていた。

壇上でその教授はまず、卒業試験の最優秀成績者を発表した。その学生の名前が読み上げられた時、私は一瞬戸惑ったが、どうやらそれは私のようだった。なにやら、卒業に向けた三科目の試験の全てが満点だったようだ。私は、それは完全に偶然だと思っていた。確かに、試験そのものに難しさは感じなかったが、それでも必ずなにかしらのミスはあるだろうと思っていた。しかし、どうやらそうしたミスが一切なかったようであり、私は壇上に上がり、教授から表彰状を受け取った。

その後も、いくつかの賞が発表され、その都度、壇上に学生が上がり、表彰状を受け取っていた。最後には、最終試験だけではなく、年間のトータルの成績が最も優秀な学生が発表され、それは

© YOHEI KATO 2018

韓国人の男性であった。その男性の母親も卒業式に駆けつけており、彼の母親も嬉しそうであった。彼が壇上に上がってスピーチを始めると、最初は韓国で少々言葉を述べ、そのあと、一言だけ日本語を発した。

私は彼が何と述べたのかわからなかったが、それは冗談の一つであったようであり、そこからは韓国語でも日本語でもなく、英語のスピーチに変わった。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2018/12/5(水)06:55

No.1460: Nightly Prayer

It is drizzling right now, and today is approaching the end in a quiet way. I have a feeling that I want to pray to something greater than me. Groningen, 20:29, Wednesday, 12/5/2018

3482. 夢の補足と夢の続き

つい先ほど今朝方の夢について思い出していると、当初想定していたよりも細かな点を思い出すことができたと感じた。起床直後に歯磨きをしている最中に、「今朝方はどのような夢を見ていただろうか？」とぼんやりと考え、「今日は夢についてそれほど多くのことを覚えているわけではないな」と思っていた。しかし、実際に夢を書き出してみると、芋づる式にあれこれと夢の細部を思い出すことができた。

改めて振り返ってみると、旅館のような和室の窓から外を眺めた時の雪景色は、今でも忘れることができない。辺り一面は白銀世界であり、真っ白な雪が天からゆっくりと降ってくる様子は、恍惚的な美しさを持っていた。直感的に私は、外の景色は日本のどこかの町だろうと思っていた。

夢の後半では、無事に卒業式に参加することができたが、それに関してもさらに細かな点を思い出すことができる。一つには、卒業式が行われる会場に変化する前の教室には、何人かのアメリカ人がいて、その中の一人の女性が私のことを知っているようだった。実際に彼女は私の顔を見ると、それとなしに私の名前を呼び、私は彼女のことを知らなかったので、少々驚いた。そこで、彼女と少しばかりやりとりがあった。

私:「なぜ私の名前を知ってるの？」

女性:「えっ？あなたは昨年この大学院の説明会に参加してたでしょ。その時の受付であなたと色々と話をしてたからよ」

その話を聞いて、私は、「あぁ、あの時の受付の方か」と思った。それにしても彼女は、私が自己紹介がてら一度だけ名前を述べただけなのに、一年後の今もよく名前を覚えていられるなと感心したのと同時に、名前を覚えてもらっていたことに喜びも感じた。そのような場面があったことを思い出す。さらにその場にいたアメリカ人の女性の学生の一人が、後ほど卒業式の壇上で表彰されている時に、彼女の経歴がスクリーン上に映し出された場面を覚えている。驚いたことに、彼女は私が卒業したのと同じ日本の大学を卒業していた。

先ほど談笑していた時には、日本の話には一切ならず、彼女は生粋のアメリカ人であるように思えたから、まさか日本の大学を卒業しているなどとは思わなかったし、しかも自分と同じ大学を卒業しているとは夢にも思わなかった――夢の中で「夢にも思わぬことが起きる」というのは面白いものである。

そうした細かな点について思い出していると、今朝方見ていた別の夢についても思い出すことができた。その夢はそれほど長いものではなかった。

私は通常のサッカーコートを数倍に拡大したような、巨大なサッカーコートにいた。そこでは、小中学校時代の友人たちとサッカーを楽しんでいた。遊びの試合とはいえ、みんなそれなりに真剣にプレーしている。試合の途中で、間接フリーキックの場面があり、「裏にロングボールを送って欲しい」と、私はキッカーの友人に合図をした。

すると、その友人は私の合図を見てくれていたようで、ロングボールを送ってくれた。私が期待していたのはもう少し前方にボールを出してもらうことだったのだが、自分にボールが飛んできたことは良いことだと思った。しかし、そのボールは味方へのパスというよりも、シュートに近いほどの威力のあるものだったので、トラップが少々難しいと思った。実際には、キッカーの友人がボールを蹴った瞬間に、それがシュート性のものだとわかったので、トラップの方法を頭で考えるというよりも、本能的に最適な方法でそれをトラップしようと思った。するとそのトラップは、自分が想像していた以上に華麗なものであり、次のプレーに流れるように移ることができた。だが、自分の近くの地面を見ると、

そこには腰ほどの高さを持つたくさんの花が植えられていた。その花がドリブルを難しくし、グラウンダーのパスを出そうにも、無数の花がそのパスを止めてしまう。そこでは私は、ゴール前に浮き球のクロスを上げることにした。

それは私が思っているよりも緩く、弾道も低かったため、先ほど間接フリーキックを蹴った友人からは、「もっと強いクロスを！」という要求が来た。そこで私は、「どんな種類のクロスも上げることができるから、クロスを上げる前にどのようなボールが欲しいか教えてくれ」と伝えた。以降私は、ゴール前の友人が果たして合わせられるか少々疑問に思ったが、シュート性のクロスを何本が上げることにした。そのような夢も今朝方見ていた。フローニンゲン：2018/12/5（水）07:21

No.1461: Brightness of Early Morning

Because it is foggy this morning, I can't see the sun. Even so, I can perceive the brightness of the early morning. Groningen, 09:56, Thursday, 12/6/2018

3483. 作曲ノートを読み返す習慣

時刻は午前九時半を迎え、今は辺りがすっかり明るくなっている。赤レンガの家の屋根に、霜が降りているのが見える。また、道端にも霜が降りている様子を見ることができる。どうやら昨夜未明に霜が降りたのだろう。

辺りがまだ闇に包まれている頃に、小鳥の鳴き声が少々聞こえていたが、今はもう聞こえてこない。鳥たちはどこかに移動してしまったのだろうか。

今日はこれから、作曲理論の学習を進めていく。昨夜から、ドミナントモーションに関する章を読み始めており、今日はその続きから始める。今後、どんな理論書を読むことになっても、必ず譜例をキーボードで音を出しながら確認していこうと思う。これまでは、時に作曲ソフト上で音符を並べてみることをしていたが、それよりも実際にキーボードで音を出した方が早いし、より体を使った学習になると思った。今日も理論書を紐解く際には、積極的に音を鳴らしていこうと思う。

哲学者のテオドール・アドルノが指摘するように、論理は直感の反命題ではない。これは作曲理論を学ぶ意義にも関わってくる話だと思う。つまり、作曲理論は直感と反発するようなものではないと

いうことだ。これまでも繰り返し述べてきたように、作曲理論は曲作りに伴う直感を磨き、感性を磨いていくものなのだと思う。作曲理論の学習を日々継続する中で、そうしたことを実感するようになった。

早朝、いつものように、過去に作った曲を何曲か聴いていた。過去に作った曲を聴きながら内的感覚をデッサンすることを習慣にしていたのだが、これからは、それらの曲を作った時の作曲ノートを見返すことをしたい。特に、その曲で使われている調が一体何であり、その調のどういった特性や側面が表れているのかを確認したい。端的には、調性に関して自分なりの感覚を養っていくことを行っていきたい。

作曲ノートを読み返せば、どのような調を用いて、どのような実験をしようとしていたのかが分かるため、常にノートを見返しながら聴くようにする。その曲の中でどういったことを試し、それがどのような結果になっているのかを確認していく。そこから今後の実験アイデアを生み出し、次回以降の作曲実践の中でそのアイデアを試していく。そうしたサイクルを意識しながら今後の作曲実践を進めていきたいと思う。

今日は今のところ、とても穏やかな天気だ。夕方には小雨が降るらしいので、午後に散髪に出かける際には、折り畳み傘を携帯しようと思う。美容師のメルヴィンの新しい店、そして彼と話をすることが今から楽しみだ。フローニンゲン：2018/12/5（水）09:42

3484. メルヴィンの新しい店を訪れて

時刻は午後の五時に近づきつつある。つい先ほど、街の中心部から自宅に戻ってきた。午後の四時を迎えると、もう辺りは薄暗くなり、この時間帯は随分と暗い。ここからさらに日が沈むのが早くなっていくだろう。

今日の午後は、楽しみにしていた、かかりつけの美容師のメルヴィンの新しい店に行ってきた。場所は、街の中心部の市場に近く、大きな教会の裏手側にある。

店がオープンしたのは二週間前であり、先週に予約をしようと思ったらすでに予約でいっぱいだったので、今日初めてメルヴィンの新しい店に足を運ぶことになった。店に到着してすぐに気づいた

が、この店はメルヴィンの創造性とパーソナリティーが滲み出しており、大変素晴らしい雰囲気を持っていた。店内は以前の店よりも開放的であり、何よりもお客にくつろいでもらうというメルヴィンの配慮が随所になされている。店内に入ると、一人の客の髪を切っている最中であったが、私たちはすぐに挨拶の言葉を交わし、「コーヒーでも飲みながらくつろいでくれ」とメルヴィンは述べた。

メルヴィンが笑顔で指差す方向には、新品のコーヒーマシンがあり、早速一杯コーヒーをもらった。コーヒーの豆にもこだわっているようであり、このあたりにもメルヴィンの配慮が窺える。店の構想については、以前よりメルヴィンから何度も話を聞いていたが、店を訪れた客がくつろげるためのソファが置かれていたり、客が退屈しないように書籍が置かれていたり、ゲーム機まで置かれている。

メルヴィンが以前述べていたように、私たちの世代には懐かしいゲームを小さなスーパファミコンで楽しむことができる。メルヴィン曰く、先日は、お互いに見知らぬ客同士がゲームで盛り上がり、そこでコミュニケーションがなされていたようだ。

しばらくして私の前の客が店を去ると、私の番となり、そこからはいつも通り、メルヴィンと会話を楽しみながら時間を過ごした。新しい店をオープンする前後はとても忙しかったようだが、今は少しずつ慣れ始め、ビジネスも軌道に乗り始めているようで何よりである。

店の壁には、メルヴィンの友達のアーティストが壁に直接描いたアートがあった。今のところメルヴィンは、一人で新しい店を経営していくらしいが、気の合う美容師が見つかれば、一緒に働きたいとのことであった。店に置かれている家具や品物には一つ一つこだわりがあり、どれも非常にお洒落であった。髪を切ってもらっている最中に、メルヴィンの母親が店を覗きに来て、挨拶を交わした。メルヴィン曰く、店の大工作業のいくつかを母親に手伝ってもらったらしく、それを聞いて私は驚いた。

細かな話では、以前の店ではデビットカードしか受け付けていなかったが、新しい店ではクレジットカードでの支払いもできる。そこで私は、メルヴィンに暗号通貨での支払いを受け付けることを今後は考えてみたらどうかと提案してみた。メルヴィンもそれを考えていたらしく、今夜詳しく調べてみるとのことであった。

© YOHEI KATO 2018

クレラー・ミュラー美術館の近くの町アーネムは、オランダの中でも暗号通貨に対してフレンドリーであり、町の一角の多くの店で暗号通貨を使用することができる。もちろん、アムステルダムも暗号通貨で支払える店がここ最近増えてきているようだ。私が住んでいるフローニンゲンでも、暗号通貨に関するミートアップが徐々に増えているようだ。だが、暗号通貨で支払いができる店はまだほとんどないのではないかと思う。仮にメルヴィンの店で暗号通貨を導入したら、随分と革新的な試みであるから、話題性があるのではないかと思う。

日本で暗号通貨がどれほど普及し始めているのか定かではないが、暗号通貨に関する日本の税制は極めて問題があるように思える。あれだけ高い税率であれば、誰が暗号通貨を積極的に使うのだろうかと思ってしまうし、暗号通貨による投資なども行えないだろうと思う。

暗号通貨に関するオランダの税制はとても寛容的であり、計算式は複雑だが、日本の税率に比べると極めて低い。日本の税制を調べてみると、例えば暗号通貨に関する課税所得が1,000万円の場合、住民税10%と合わせると43%かかるが、オランダの税制においては1.5%ぐらいである。仮に課税所得が4,000万円を超えると、日本の場合は住民税と合わせると55%もの税率となるが、オランダの税制においてはやはり数%程度である。暗号通貨の使用ないし、暗号通貨の投資という観点から見ると、日本は少々見劣りする国のように思える。

いずれにせよ、メルヴィンは今夜暗号通貨に関する調査をするようであるから、私も専門家ではないが、個人事業主が活用する上で良さそうな暗号通貨がいくつかあるため、彼に情報を提供しようと思う。フローニンゲン：2018/12/5（水）17:35

3485. 子犬を探し、詩集を購入する夢

今朝は六時過ぎに起床した。起床直後にヨガを実践し、その後にトイレ掃除を行った。ここから一日の活動を徐々に始めていきたいと思う。

今は午前七時を迎え、辺りは闇と静寂に包まれている。昨日と同様に、今日も夕方までは天気が崩れることがない。夕方以降には雨が降り始めるという予報が出ている。今週までは雨の影響もあって比較的暖かいが、予想していた通り、来週からはグッと寒さが増す。すでに12月に入っており、12

月のフローニンゲンにしては暖かいなとこれまで思っていたが、来週から本格的に寒くなると思っていいだろう。

いつものように、今朝方の夢について振り返ることにする。今朝は大きく分けて二つの夢を見ていた。まずは最初の夢について書き留めておきたい。

夢の中で私は、ある近未来都市にいた。その都市の建物は一風変わっており、今から数十年後ないしは、100年後ぐらいの世界の町の姿を現しているように思えた。

私は人がほとんど住んでいない住宅街の中にいた。もしかすると、そこは人の気配はほとんどないのだが、家があれだけ多く建っていたことを考えると、実際には多くの人が住んでいたのかもしれない。いずれにせよ、住宅街を歩く人はほとんどいなかった。厳密には、そこを歩いていたのは私だけであった。

住宅街を歩いていると、私はある一軒の家の前で足を止めた。そこはどうやら友人の家であるとわかり、私は玄関の呼び鈴を鳴らした。すると、友人が出てきた。ドアを開けた瞬間に、階段を通じて、二階から元気のいい子犬が駆け下りてきた。私の方にものすごい勢いで近づいてきたのだが、その瞬間に、遠くの方からどこかの家の犬が遠吠えを始め、友人の子犬はそれに反応した。

友人の子犬は私の横を勢い良くすり抜け、玄関から外に飛び出してしまった。友人は「しまった」という表情を浮かべた。その時に、階段からまた別の子犬が玄関に走ってきて、その子犬も遠吠えが聞こえて来る方向に走って行こうとしている。私は危険を感じたため、友人の子犬が外に出ないように、今度は友人の子犬を捕まえ、そして抱きかかえた。

走り去っていったもう一匹の子犬の安否が心配だと思った瞬間に、友人の母親の声が部屋の奥から聞こえてきた。「まさかXXちゃん（子犬の名前）を外に出してないでしょうね？」という、心配そうな声が聞こえてきた。友人は母親に正直に事実を伝え、私は彼と一緒に、走り去っていった子犬を探すことにした。

私：「犬の遠吠えが聞こえてきた家の方向はあっちの方だね」

友人:「うん、そのはずだ。あっちに行ってみよう」

私たちは、人気のほとんどない住宅街を彷徨いながら、子犬を探した。だが、探しても探しても、子犬は見つからない。もう犬の遠吠えは聞こえず、辺りはとても静かであった。住宅街には人の姿が見られないため、子犬の行方を人に聞こうにも聞くことができない。

住宅地のある一角に差し掛かった時、突然隣にいた友人がいなくなっており、街の構造が変化した。街全体の道路が奇妙な傾斜を持ち始めた。私は、つい先ほどまで立っていた地点から、傾斜の下の方に滑り落ちていった。傾斜を下った先には再び平坦な道があり、先ほどまでは整備されたアスファルトの道を歩いていたが、そこには森の小道のような道が広がっていた。その道を歩いて行くと、一つの小屋を見つけた。遠くから見ても、その小屋はみすぼらしいものではなく、むしろ立派なワラ作りの小屋であった。

その小屋に近づくと、どうやらそこはお店のようだった。何が売られているのか興味があったので、中に入ってみると、日本人の年配の女性が店を切り盛りしているようだった。その方はとても気さくな方であり、「どうぞ中を見ていってください」と私に述べた。見ると、骨董品から農作業道具、さらにはガラス細工から書籍に至るまで、いろいろな品がそこで販売されていた。

私は出口付近にあった書籍コーナーで足を止め、どのような書籍が売られているのかを確かめた。二冊ほど私の目を引く書籍があった。どちらも日本語の書籍なのだが、一冊は古語で書かれた詩集、もう一冊は日本の滝や泉、さらには森などのイラストが入った、現代語で書かれた詩集であった。私は特に後者の書籍に惹かれ、それを購入することにした。そう決意したところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/6(木)07:33

No.1462: Celebration

What I'm feeling right now is celebration for everything. Today will end, and tomorrow will come.

A new day will begin in the world where time and the self dissolve into one. Groningen, 21:00, Thursday, 12/6/2018

3486. 豊かさを増す夢の世界と閾値

昨夜就寝前に、直感的に今夜は夢を見ないかもしれない、ということを思っていた。しかし、先ほど書き留めたように、今朝方も印象に残る夢を見ていた。ここ最近は、本当に印象に残る夢を見る日々が続く。無意識が活性化しているのか、それとも自分の夢の想起力が非線形的な発達を遂げたのかもしれないと思う。どちらも共にある一定程度の正しさを持っているような気がする。

夢を想起する力が高まり、夢について記述すればするほどに、夢の世界そのものが豊かになり、それが現実世界の豊かさにもつながっているように思えてくる。夢の世界も現実世界も、一つの認識世界と括ることができるため、両者の間に相互作用を見て取ることは十分に可能だろう。

具体的な作用や効果についてはわからないが、夢の世界が豊かになり、それを想起する力が高まってくると、日々の探究活動や創造活動がより深まっていくことを実感する。端的には、自らの創造性が涵養され、それが探究活動と創造活動に随分と大きな影響を与えているように思える。

ここ最近の自分の無意識がなぜ活性化しているのかはわからない。そういえば、今から二ヶ月ほど前にボストンに旅行に出かけた時、その一週間の間にはほとんど夢を見ていなかったように思う。旅行中は、間違いなく新しい刺激を絶えず受け取っており、それを咀嚼するために夢を見るかと思っていたのだが、実際にはそうではなかった。一方で、旅行をせずとも毎日が常に発見の連続であることを考えると、それらを咀嚼するために毎晩夢を見ているという理由以外の事柄が隠れているように思えてくる。今はそれが何なのかわからないが、それが何かを問うた瞬間に、いつかその答えらしきものが自分の内側から姿を見せるだろう。それが何なのかを知ることは、今からとても楽しみだ。

時刻は午前八時に近づきつつあるが、辺りはまだ暗い。空がダークブルーに変わってすらなく、日の出の時間はもう少し先のようだ。今日は午前九時から午後の三時まで、水道管の工事があるようであり、水道の水が出なくなる。そのような知らせが一昨日郵便受けに入っていた。

昨日、かかりつけの美容師であるメルヴィンに髪を切ってもらい、随分とスッキリした感覚がある。いつも七週間に一度ほどのペースで髪を切ってもらっているのだが、本当は六週間に一度が良いペースなのかもしれない。髪の毛の伸びに関しても面白いことがあり、ある数日間を境目として、突然髪の毛がうっとうしくなるのである。今の生活リズムが常に調和の取れたものであることを考えると、髪

の毛の伸びるペースはおそらくほぼ一定だろう。そうした一定にわずかばかり伸びていく髪に対して、ある境目から急にうっとうしさを感じるというのは面白い。そこにはどうやら閾値があるらしい。私の場合は、それが六週間後をめどに起こる。いつも閾値を超えてから散髪の予約をするのだが、メルヴィンは多忙な美容師であるから、すぐに予約を入れることは難しく、いつも七週間後以降になってしまう。そうしたことから、今回から、毎回の散髪を終えるたびに次回の予約を入れることにした。次回は、メルヴィンがオーストリアの山にウィンタースポーツを楽しんで帰ってきた次の日に髪を切ってもらうことにした。フローニンゲン：2018/12/6（木）07:51

No.1463: Beyond Rainclouds

It has been drizzling since the early morning. I'll devote myself to studying composition theory today, too. Groningen, 09:10, Friday, 12/7/2018

3487. ヘリコプターで世界中を巡る夢

空が少しばかりダークブルーに変わり始めた。八時半を迎えれば、辺りは随分と明るくなるだろうか。

早朝に今朝方の夢について書き留めていた。それ以外にも、もう一つ印象に残る夢を見ていたため、それについても覚えている限りのことを書き留めておきたい。

夢の中で私は、大学時代の女性友達の話を聞いていた。彼女はすでに結婚しており、子供がいるのだが、どうも夫との関係が良くないようであり、それに関する相談を私は受けていた。彼女の話を全て聞こえたところで、「気分転換に自然の中に行くのはどうか？」と私は提案した。彼女はあまり自然の中で過ごすことに馴染みがないようであったから、私は率先してガイド役を務めることにし、今度の休みに自然の中に行こうと誘った。

彼女もそれを楽しみにしているとのことであり、その返事を聞いた瞬間に、私たちは雪山の中にいた。雪山と言っても、吹雪が吹いているわけではなく、空は快晴であり、地面の雪がきらめいているような場所である。彼女の他にも、私は他の友人も今回の自然散策ツアーに誘っていた。しかし、

その他の友人も確かに私の友人のはずなのだが、彼らが妙に見知らぬ人に思えてしまうという不思議な感覚があった。

いずれにせよ、私たちは数人ほどで雪山の小道をハイキングすることにした。ある地点に到着すると、突然夢の場面が変化し、私は空を飛ぶヘリコプターの中にいた。見ると隣には、先ほどの彼女が座っていた。私は運転手に声をかけ、今どの辺りを飛んでいるのかを尋ねてみた。

運転手:「今はインドの上空ですね。あっ、あそこを見てください。有名な古代遺跡がありますよ」

私:「本当ですね～。まさかこのような遺跡を眺めることができるとは。それで、今から向かっている先はどこの国なんですか？」

運転手:「インドを通過して、まずはローマに向かいましょう。そこでまた色々なものを見るのはどうでしょうか？」

私:「いいですね、是非お願いします」

インドを超え、インド洋なのか地中海なのかわからないが、穏やかな大海原の上空をヘリコプターが飛んでいる最中に、トビウオが海面からジャンプする姿やイルカが優雅に泳いでいる姿を眺めることができた。そのような光景に私は興奮し、運転手と隣に座っていた女性友達に、熱心にトビウオとイルカの泳ぎについて説明していた。私は海洋生物学者ではないので、学術的なことはわからないはずなのだが、「流動性」と「慣性の法則」という二つの概念を中心に、トビウオとイルカの泳ぎ方について熱く語っていた。

私:「今説明したような観点から言えば、特にイルカの泳ぎは無駄がなく、見事ですよね。ほらっ、あそこにいるイルカは一切無駄のない動きで滑らかに泳いでいますよ」

女性友達:「確かにそうね」

運転手:「実に見事な泳ぎですね」

私:「イルカのあのような泳ぎを見ると、このヘリコプターに関しても、プロペラを回す必要などないのではないかと思います。一度気流に乗れば、ヘリコプターは何もせずとも前に進んでいくかもしれませんね」

運転手:「それはちょっと危険そうですね(笑)」

そのような会話をしていると、目的地に到着した。先ほど運転手はローマに行くと述べていたのだが、そこはどうもペルシャ風の雰囲気がある。どうやらそこはトルコのようだった。

私たちは一旦ヘリコプターから降り、先ほどは上空からインドの古代遺跡を眺めただけにとどまっていたが、今度はトルコの古代遺跡を実際に歩いて眺めてみようということになった。古代遺跡の中に入ると、そこはとても厳かな雰囲気を放っていた。私は遺跡の中の美しい光景に釘付けになり、言葉を失っていた。

しばらく遺跡を眺めると、実はヘリコプターに乗っていたもう一人の人物が突然後ろから声をかけていた。彼はメキシコ人なのだが、日本語を話すことができる。彼曰く、ヘリコプターに乗って元の場所に戻るのではなく、この場所に残りたいと述べている。ヘリコプターの運転手も指摘していたが、それは違法である。彼のパスポートではそれは不可能なことだった。しかし、それでもメキシコ人の彼は頑なにこの国に残りたいという。そうであれば、私たちは止める道理もなかったので、その場で彼と別れ、再びヘリコプターに乗って元いた場所に帰ろうとした。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2018/12/6(木)08:20

No.1464: A Drizzling Rain on a Walkway

Like yesterday, it has been drizzling since the early morning. I'll continue to study composition theory and then read a book about the metaphysics of human consciousness. Groningen, 16:05, Friday, 12/7/2018

3488. 霧立ち込めるある日の午後より

つい先ほど仮眠を取り終えた。仮眠の最中、心象イメージとしてピアノの鍵盤が脳内に現れ、諸々のキーの音を試行錯誤しながら奏でていた。ちょうど仮眠の前に、フラットの調号が付いたキーを

MIDIキーボードを用いて繰り返し弾いていた。それが影響をして、仮眠中のサトル意識の状態の中でも鍵盤を弾くことにつながったのだろう。こうした内的ビジョンが立ち現れるほどに、今日も午前中は作曲理論の学習をしていた。早朝の作曲実践を終えてからは、午前中はほぼすべての時間を作曲理論の学習に充てていた。

特に和音について学習し、様々なタイプの和音のみならず、ダイアトニックコードの様々なコードを学習していた。まとめノートを取りながら、時にキーボードで音を出しながら学習を進めていたため、内容としてはテキストの一章分しか読み進めることができなかったが、そのような速度で全く問題ないと思う。今使っているテキストは二読目であるから、一つ一つの項目を理解しながら丁寧に読み進めていけばいい。

つい先ほど小雨が降り始めたが、今はまた雨が止んでいる。天気予報を見る限りでは、もう少し雨が降るかと思っていたのだが、どうやら夕方から雨が本格的に降り始めるらしい。

今日の午前中の雰囲気を思い出すと、とりわけ静かで穏やかであった。フローニンゲンの土曜日の朝を象徴するような世界がそこに広がっていた。自分がどこか果てしなく続く祝祭に包まれて生きているかのように感じていた。そうした感覚を味わうことができているというのは、日々が充実感と幸福感に包まれているということだろう。

今日はこれから、いよいよハーバード大学教育大学院への出願を済ませたいと思う。提出期限まではあと一ヶ月ほどあるのだが、すでに必要書類は全て揃っており、ここから年始にかけては少々協働プロジェクトの仕事が立て込む可能性があるため、今日の夕方までに提出を完了させたい。そのためには、まずは自分の経歴が記載されているCVを最終版にしていく。半年前のものから大してアップデートする必要はないのだが、もう一度誤字脱字がないか、記入漏れなどがないかを確認していく。

CVを最終版にしたら、今度はもう一度、志望動機書を最初から最後まで読み返し、最終版にする。それが終われば、提出書類については全て最終版になったことを意味する。あとはそれらをオンラインアプリケーション上にアップロードし、オンライン上で記載するその他の項目についても、再度誤字脱字、記入漏れなどがないかを確認していく。そこまで完了すれば、最後に出願料の支払い

をすれば終わりとなる。結果については、三月の中旬あたりにわかるそうである。どのような結果になったとしても、今後も今と変わらず、探究活動と創造活動に専心する日々が続いていくだろう。フローニンゲン：2018/12/1（土）14:53

時刻は午後三時半を迎えた。今日は、早朝から濃い霧が出ており、それは昼食を摂る頃になってようやく消えていった。今日は太陽の光を拝むことができていないが、それでも静かな充実感と共に一日が過ぎていくのを感じている。

白いカモメたちが曇った空の下を旋回している。

前回集中的な座禅をしてから二週間が経とうとしており、今週末の日曜日は時間があるので、日曜日の午後に再び五時間ほど座禅瞑想をしたいと思う。隔週で接心に参加しているような状態が続いているが、それが必要だと思うのであれば必要なだけ続けていく。

ここ最近は作曲理論の学習の際に、日本語のテキストを使っているため、英文を読まない日が続いている。この八年間において、数日以上英文を読まない日などなかったように思う。確かに、先週から始まった勉強会の準備や実際の勉強会の中で英語の論文を読んでいるが、それでも英文に触れるのは微々たる量だ。作曲理論のまとめノートを作り終えるまでは、今のような状態が続くだろう。

もちろん、英文を読みたいという衝動が生まれたら、それに逆らうことはせず、気の向くままに気の済むまで英文を読んでいく。とりあえず、今は作曲理論の学習に集中したい。午前中も作曲理論の学習に多くの時間を充てていた。その中で改めて、理論を学ぶことは本当に楽しいという素朴な感情を持った。

自分の内側で少しずつ知識項目が蓄積していく感じがあり、それが確かに自分の身になって構築されていく感じがある。昼食前には、作曲理論を学習していることに対して、涙が出るほど嬉しくなってしまったので、込み上げてくる感情を笑顔に変えた。

今、こうして自分が作曲理論を学んでいることにはきっと何か大切な意味があるのだろう。それはこれまでの自分には決して見出せなかったような意味であり、これまでの自分では出会うことができな

かった意味だと思う。新たな意味との出会いをもたらすのは、今よりも一歩成熟した自己なのだと思う。人生が新たな方向に少しずつ動き出し、人生の新たな意味が見え始める。

今日は少なくともあと一回ほど作曲実践をしたいと思う。作曲に関する方針を確認すると、音楽上の無数のアイデアを小さな形にしていくことを継続していく。大きな作品は決して作らない。

誰が読むのかわからないような膨大な量の学術論文のような曲を作らないようにする。一方で、学術論文には固有の価値があることは確かであり、論文でいうところの一つのパラグラフの主要なアイデアのみを紹介するようなイメージで曲を作っていく。そうした作品を膨大に作り続けていく。

本日最後の作曲実践は夕食後に行おうと思う。その際にも、常に新たなことを試し、新たな発見を得ていくという姿勢を忘れないようにする。フローニンゲン：2018/12/6（木）15:51

3489. 人生のある一日

時刻は午後の七時半を迎えた。無性に笑いがこみ上げてくるほどに、今日も一日があっという間に過ぎていった感覚がある。

早朝に、今朝方の夢を振り返ったことがつい先ほどの出来事のように思える。仮に今夜もまた夢を見たら、私は明日の朝もまた夢について書き留めるのだろう。

真っ暗な闇が外の世界に広がっている。夕方に観察をしてみると、もう午後の四時を迎えると辺りは薄暗くなり始めている。今、一台の車が明かりを灯しながら小道を走っていく姿が見える。そして、その車はどこかにいなくなった。

一人の日本人がオランダのフローニンゲンという町で生き、一つの人生を日々形作っているということ。私たちは特別な創造活動に従事しなくとも、人間の一生はそもそも創造的な産物なのだと思う。

昨日、かかりつけの美容師のメルヴィンの元を訪れ、話をしている最中に、「フローニンゲンは自分の第二の故郷だ」ということを私は述べた。その言葉に加え、私はいつか再びフローニンゲンに、あるいは少なくともオランダに戻ってこようと思う、ということを彼に伝えた。

これからの自分の人生はどのように進んでいくのだろうか。気がつけば自分の人生は30年を超えていた。ここからの30年、さらにそこからの30年、そしてさらにそこからの30年はどのように進んでいくのだろうか。それはもうよく分からない。来年の今頃に世界のどの国にいるのかさえ分からないのだから。

来年の今頃は、アメリカにいるのだろうか。はたまたスイスにいるのだろうか。

次回メルヴィンの店に訪れるときには、店のオープンを祝う品を持って行こう。今回はそれを持っていくのを忘れてしまった。

メルヴィンが述べているように、メルヴィンの店は何か特別な磁場を持っているようである。彼の店に来る客は似たような特徴を持っており、そしてメルヴィン自身が自分の店に来るとどこかエネルギーを与えてもらっているような感覚になっているという。フローニンゲンの街の中心に位置する彼の店は、何か特殊な力が宿っている店なのかもしれない。それを後押しするように、店に清らかなエネルギーが集まって来るような品を持って行こうと思う。

一つはパワーストーンであり、もう一つは彼の店に素晴らしい客が今後も後を絶たずやってくるように、縁結びの品を持って行こう。本来それらは、知人の方が私にくれたものなのだが、それらをメルヴィンに譲り渡す時期にさしかかっているように思う。それらはふさわしい人の元へと渡っていくものにちがいない。ある人がある場所に導かれていくのと同じだ。

今日は夕方に、来年の一月に出版予定の書籍のあとがきのドラフトを完成させた。これを数日間ほど寝かせ、今週末に共著者の方へ送ろうと思う。

今回の書籍は、『なぜ部下とうまくいかないのか』と同様に、物語仕立てなのだが、登場人物の個性が豊かであり、共著者の方が書いてくれたストーリーが何よりとても面白い。書籍の合間合間に解説を執筆していくことと全体の監修が私の役割であり、その過程の中で物語を読みながら、随所随所に感銘を受け、自分の内側に深く響くものがあった。そうした書籍がもう間も無く世に送り出せることを嬉しく思う。フローニンゲン：2018/12/6（木）19:50

3490. 親切心に溢れる夢

今朝は六時に起床し、六時半から一日の活動を始めた。今、外の世界では小雨が降っており、通りを走り去った車が水しぶきを上げる音が聞こえてきた。どうやら今日は一日中雨のようだ。それは決して激しい雨ではなく、静かに降り注ぐような雨になるだろう。

今朝は一度、午前三時に目を覚ました。目を覚ます直前まで、私は一つの夢を見ていた。

夢の中で私は、実際に通っていた中学校の中にいて、数学の授業を受けていた。数学を担当する若い女性教師が私を指名し、数学の問題について尋ねてきた。その問題はそれほど難しくなかったから、私はその問題の解法についてすぐさま答えた。その後、どのような経緯か定かではないが、教師が声を荒げながら私に何かを指摘し始めた。その指摘が理不尽である点、そしてそのように子供たちに対して声を荒げてしまうほどに未成熟な心を持っている点を私は指摘し返した。もちろん、そうした指摘に対して、教師はさらに怒りの感情を覚え、大人気なくまたしても声を荒げて何かを叫んでいる。

こうした人間を相手にしていても仕方ないと思った私は、ちょうど授業も退屈であったため、家に帰ろうと思った。教室を静かに後にしようと思い、席を離れてドアに向かっていくと、教師は私の腕を強く掴んだ。その瞬間、私は反射的に自己防衛のためからか、護身術を使ってその教師を背負い投げのような形で目の前の生徒の机の上に叩きつけた。教師は背中を激しく強く打ち、机から転げ落ちた。

私は家に帰ろうと思っていたのだが、もう少しその場にいて、教師の様子を眺めることにした。すると教師はよろめきながら立ち上がり、再び私を止めにこちらに向かってくる。「仕方ない」と私は思いながら、ムエタイの前蹴りを教師の腹に入れた。すると教師は、一気に教室の後ろの壁まで吹っ飛び、壁に頭をぶつけ、静かになった。この間、他の生徒も教室にいたのだが、彼らは一切無反応のようであった。また、私も彼らを気にしている様子もなかった。

数学の教師と私のやり取りの音が他の教室にも聞こえていたらしく、何人かの教師が教室に駆けつけてきた。教室の後ろでうずくまる教師を見た他の教師たちは、何が起きていたのか正確にわからないままに、私を止めにかかった。私は終始一貫して冷静であり、あくまでも正当防衛として数学の

教師を投げ飛ばしたり、蹴りを入れただけなのだが、他の教師たちも私の方に向かってくるので、一言述べた。「向かってくるのは構わないのですが、僕の体に触れたらあのようになりますよ」と、地面にうずくまる数学教師の方を指差して他の教師に伝えた。忠告にもかかわらず、屈強そうな教師がまず私に向かってきて、私の腕を掴んだので、そこでも正当防衛として、掴んだ教師の手の小指を即座に折った。するとその教師は悲鳴を上げて地面に伏した。それにもかかわらず、他の教師がまた私に向かってきた。

教師たちが一向に学習しないことに私は唖然としたが、向かってくる教師が私の体に触れた瞬間に、先ほど数学教師に対して行った投げ技とは違う技を仕掛け、その教師を地面に叩きつけた。そして、彼の右足の足首の骨を一瞬にして折った。そこからはもう他の教師は襲ってこなかった。私は校舎を後にし、体育館の裏手から学校を出て行き、自宅に戻った。

自宅に戻る道中に、数学の教師を背負い投げした際には、脊髄が損傷しないように配慮をし、前蹴りをした際には、今後その教師が赤ちゃんをお腹に身ごもることができるように配慮していた。そして何より、壁に頭をぶつけることは予想されていたことであるから、その拍子に死なないように配慮した蹴りを行っていた。また、その後私に襲いかかってきた教師たちの骨を折る際にも、できるだけ綺麗に骨を折り、折れた骨が回復した際には、以前よりも強い骨になるように配慮していた。そうした配慮があったにもかかわらず、結局彼らはそうしたことに気づきもしないだろうと思いながら、私は自宅に向かった。フローニンゲン：2018/12/7（金）07:04

No.1465: The Beginning of a Blissful Day

A peaceful Saturday morning came. It is drizzling outside, I can perceive the beginning of a blissful day. Groningen, 08:38, Saturday, 12/8/2018

3491. 救急車に乗り、公民館で講演する夢

時刻は午前七時を迎えた。確かに今日は一日中雨のようだが、気温は比較的暖かい。明日明後日も天気が少々崩れるようである。また、来週からは、私が予想していた通り、気温が下がり始めるらしい。これから寒さが本格的に厳しくなっていくだろう。

今朝は午前三時に一度目を覚まし、そこでトイレに行き、水を一杯飲んで再び就寝した。その間に、目覚める前に見ていた夢を振り返っていたのを思い出す。その夢は、つい先ほど書き留めたものである。夢の中で出てきた数学教師のみならず、小さなことでいちいち声を荒げるような未成熟な精神を持った大人が多すぎることには辟易している。

もしかすると、たいていの親や教師はそうなのかもしれない。そうした親や教師のもとで育つのはつくづく不幸である、と考えていた。一方で、声を荒げるような親や教師を一気に黙らせるような力を発揮することができれば、その子供には強靭な成長力が備わっていると言えるかもしれない。多くの子供は、コンクリートのような親や教師を突き破ることはできないのだが、ごく少数、それらのコンクリートを突き破る子供たちがいるのは確かだろう。

後者の子供たちに関しては、その後一生涯をかけて自己を深めていく可能性が高いが、問題は前者のような子供たちである。いや、問題が子供たちにあるというよりも、真の問題はコンクリートのような親や教師たちである。その問題についてぼんやりと考え事をしながら、再び就寝に向かった。再度目を閉じてベッドの上に横になると、脳内に眩い白い光が知覚された。それはセロトニンが異常に分泌された時に起こる現象なのだろうか。そのようなことを少々考え、こうした強烈な光が知覚されることは時折あるため、気にせずに再び就寝に向かった。

すると、そこからもひとつ別の夢を見ていた。夢の中で私は、ある広い部屋の中にいた。それはオフィスのフロアのようであり、実際に何人もの人がそこで働いていた。すると突然、そこで働いていた人が突然倒れだし、意識不明の状態に陥った。理由はよくわからないのだが、見ると、なぜだか出血している人もいた。ここは日本であり、私はどのように救急車を呼んでいいのかよくわからず、とりあえず携帯電話から911を押した。すると、アメリカ人の女性オペレーターが電話越しに現れ、私は事情を説明した。

その瞬間に、オペレーターが日本人男性に変わっており、さらにはその人は救急車の運転手とのことだった。現場の状況を正確に伝えることに関して、私よりも、隣に立っていた医師の男性の方がふさわしいと思ったため、私はその男性に携帯を渡した。すると、その医師の説明はあまりにたどたどしく、極めて回りくどかった。「その情報は果たして必要か？」というようなものがたくさんあり、少々呆れていたところ、「携帯、切られちゃいました」とその医師は述べた。どうやら救急車の運転手は、

呆れて電話を切ったらしい。しかし幸いにも、すぐに救急車が現場に駆けつけ、原因不明で倒れてしまった人たちを病院に搬送した。

一応私は付き添いとして、救急車の後ろに乗り、病院まで行くことにした。しばらく救急車に乗っていると、ある時、窓の外にどこか見覚えのある空き地が見えた。ちょうど救急車が信号待ちのため停車したので、私は運転手に告げて、そこで降ろしてもらうことにした。空き地に行ってみると、空き地の横に、公民館のような建物があった。どうやらそこは予備校のようであった。

公民館の入り口から中を覗こうとすると、一人の男性がドアを勢い良く締めた。どうやらその男性は私のことを予備校生だと思ったらしく、この予備校は時間厳守が徹底されており、仮に1秒でも遅れたら、教室に入ることは許可されない仕組みになっているようだった。その男性は講師というよりも、サポート役のチューターか何かだった。彼はものすごい剣幕で、「もう遅い！」と私に叫んだ。私は、「いえ、ここの生徒ではないのですが」と述べると、手のひらを返すように、その男性は私に謝ってきた。

チューターの男性:「失礼しました！」

私:「いえいえ、ちょっと中が気になったもので。実は医学部に入り直したいと思っており、中を見学させてもらえませんか？」

チューターの男性:「そうですか、それでしたら、どうぞどうぞ」

私は自分で述べた言葉に驚いたが、その時の私は医学部に入り直すことを考えていたようだ。チューターの男性に案内されると、その公民館のような建物の中が意外に広いことに気づいた。

チューターの男性:「よろしければ、今からちょっと講演を行っていただけませんか？」

チューターの男性は私にそのような依頼をしてきた。あまり気乗りはしなかったが、特に断る理由もなかったので、そこに集まる大勢の保護者と生徒の前で少しだけ講演を行うことにした。日本の大学を卒業し、その後企業に入り、そこから米国と欧州の大学院で学び今に至る流れを紹介しようと

思った。大勢の視線が集まる中、まずは挨拶をし、自分の名前を述べたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン：2018/12/7（金）07:36

3492. 形容詞を述べるゲームと地球の外で生まれた女性に関する夢

時刻は午前八時に近づきつつあるが、辺りはまだ暗い。小雨が引き続き降っている。それにしても、ここ最近は毎朝随分と夢の振り返りを行っている。それが一つのシャドーワークとして完全に確立されたかのようである。

今朝方見ていた二つの夢に関しても、いろいろと思うことがあり、それは自分のシャドーと密接に関わっていることに気づく。そういえば、二つ目の夢の中で講演を行った後にも、また別の夢を見ていた。

夢の中で私は、先ほどの公民館と似た様な建物の中にいた。先ほどまでは日本人ばかりがそこにいたのだが、今度はアメリカ人しかそこにいなかった。なにやら、アメフトに関するミーティングをそこで行っているようだった。アメフトのコーチや監督が二、三人ほどおり、あとは全員チアリーディングのメンバーであった。みんなが半円になって椅子を並べ、壁側のスクリーンに映し出された人物とオンラインを通じてミーティングを行っている。私もそのミーティングに入れてもらい、彼らの話を聞いていた。

最初にチアリーディングのメンバーの女性たちが一言ずつ前回の試合について振り返りのコメントをしていった。その後、一人のコーチがスクリーン越しに、どこか別の場所にいるコーチに向かって振り返りのコメントを述べていた。こちらの部屋で残りのコーチが全てコメントし終えた後、私にも何かコメントをして欲しいとお願いしてきた。私は何を話すかを一切考えていなかったのだが、少しばかりコメントをした。

すると突然公民館の形が変わり、体育館に変化した。その体育館の壇上の地べたに私は座っていた。周りを見ると、先ほどのアメリカ人ではないアメリカ人の男女の大人たちがそこにいて、円になってゲームをしている。私もそのゲームに参加していた。そのゲームは至ってシンプルであり、円の隣の人がある形容詞を述べ、その隣の人がその形容詞を用いた例文を作り、それを作り終えたら、新しい形容詞を述べるというものである。

ゲームの進行を観察していると、みんな何とか難しい形容詞を出そうとしているようだったが、どれも簡単な形容詞だった。私の横に座っていたアフリカ系の男性が形容詞を述べる番になった。彼はニヤリとしながら、“supine”と述べた。一同も一瞬、“supine?”と戸惑いの表情を浮かべていたが、それはGREの単語学習の一環で覚えていたものであったから、私はさっと例文を作り、その後何の形容詞を述べようかと考えた。

形容詞を考えている最中に、周りのアメリカ人たちは「君は日本人ではないな」と笑いながら述べていた。私は別に横の人を困らせようと思っていたわけではなく、アメリカ人ならば誰でも知っているはずの形容詞“abominable,” “rigorous,” “robust,”の三つが脳内にすぐに思いついたため、結局“robust”を選んだ。そこで私の意識は一気に飛び、自分があるドラマの中にいることに気づいた。そのドラマの中の主人公はアメリカ人女性であり、ドラマの舞台はアメリカである。

おそらく舞台は、アメリカの片田舎の町であった。ドラマの主人公は、二十代かそこからのアメリカ人女性であり、彼女は自分の出自の謎を知り、その謎が人に知られないようになんとか守ろうとしていた。一方で、その町の多くの人たちは、彼女の出自の謎と関係した、町の教会の欠けた石碑の文字の解明に熱心に取り組んでいた。私はそのドラマの中にいながらも、そのドラマを観察する者として存在していた。

主人公の女性の出自を簡単に述べると、彼女はこの星の生まれではない。彼女は地球の外で生まれ、いわば地球外生命体である。もちろん、姿形は人間なのだが、生まれた場所はこの星の外にあり、彼女は何かのきっかけで幼児の時に地球に降り立ったようだ。そこからこのドラマがどのように進行して行ったのか記憶が定かではない。

覚えているのは、町の人たちが欠けた石碑の文字の解読を熱心に進めた結果、あと一歩のところで主人公の女性が地球外生命体であるということを発見することに近づいたことである。彼女自身は、自分がこの星の生まれではないということを自覚しており、アイデンティティの葛藤を抱えながら日々を生き、なんとか自分の身元がばれないように生活を営んでいた。

ドラマの最後の方で、舞台となるアメリカの片田舎の町にいた私は空を見上げた。すると、空から欠けた石碑の残りの部分が、一つの石板としてゆっくりと降りてくるのが見えた。

© YOHEI KATO 2018

そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2018/12/7(金)08:10

3493. 理論という集合的叡智

もうじき正午を迎える。今朝は早朝から小雨が降り続けている。書斎の窓ガラスに付着する雨滴の量が若干増えたように思える。

今日も午前中は、作曲理論の学習に時間を充てていた。サブスティテュート・ドミナントに関するまとめノートを作り、先ほどまではサブドミナントマイナーに関するまとめノートを作っていた。午後も引き続き、作曲理論の学習を進め、今読み進めているテキストの章とその次の章までまとめノートを作成できたらと思う。

昨日、作曲理論を学習している最中に、ふと作曲理論の学習は数学やプログラミング言語を学んでいる感覚に近いと思った。それらは共に、原理原則を学び、手を動かしながら原理原則を活用していくという点が似ていると思った。単に原理原則を学ぶのではなく、実際に学んだ原理原則を用いて数式を解いてみたり、プログラミング言語を書いてみたりする点は、作曲実践と非常に似ている。

昨夜、夕食を摂りながら、音楽理論に関するポッドキャストを聞いていると、ゲストの教授が面白いことを述べていた。音楽理論の学習は、単に音楽を深く理解するためにあるのではなく、過去の偉大な音楽家が何を考え、何を音楽空間の中で実践していたかを知ることにつながる、というような趣旨のことを述べていた。私はその点に感銘を受けた。ある偉大な音楽家が、それこそ数年、数十年かけて編み出した技法の数々がすでに理論化されており、音楽理論を学べば、私たちは一からそれを編み出す必要はないという恩恵を預かることができる。

下手をすると、一人の偉大な音楽家の一生を通じてだけでは完成せず、様々な音楽家が数百年の試行錯誤を経て編み出した技法などが音楽理論のテキストにはそれとなく掲載されていることがある。音楽理論の体系は、本当に集合的な叡智の結晶なのだと思う。そうした思いを持って、午後からも作曲理論の学習に励んでいく。再読しているテキストの章はあと半分ほどあるが、まとめノートを作り終えたら、それを何度も繰り返し読むようにする。仮にノートの項目の中に理解が難しい箇所があれば、テキストに戻るようにする。

気がつけば昼食どきとなっていたので、これから昼食を摂ろうと思う。昼食後、過去の日記を編集したり、メールを返信した後に仮眠を取り、仮眠後はシベリウスに範を求めて作曲実践を行おうと思う。フローニンゲン:2018/12/7(金)12:06

3494. 今朝方の夢

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を始めた。今朝も小雨が降っている。どうやら午後まで小雨が降るようだ。昼食前に小雨が弱まれば、近所のスーパーに買い物に出かけたいと思う。

今朝方も二つほど印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、小中高時代から付き合いのある親友とドライブをしていた。ドライブと言っても同じ車に乗るのではなく、お互いに別々の車を運転しながらどこかに向かっていた。三車線あるうちの、私は一番左側を、彼は真ん中の車線を走っていた。

交差点が近づいてきた時に、彼は急に右の車線に移ろうとした。目的地まではまだひたすら直線に進んでいく必要があるのだが、彼はなぜだか真ん中の車線から離れて、右の車線に行こうとした。ウィンカーを出し、右の車線に移ろうとしたその瞬間、後ろからものすごい勢いで走ってきた黄色いスポーツカーが彼の車に衝突した。その瞬間不思議なことが起こった。

それまでは彼は車を運転していたはずなのだが、スポーツカーがぶつかる瞬間に彼の車が消え、彼はスポーツカーに体ごとはねられる形となった。ものすごい勢いで走ってくるスポーツカーにはねられた彼は、数メートルほど飛んでいき、道端に落ちた。私は車を止め、急いで彼の安全を確かめに向かった。その際に、彼をひいたスポーツカーのナンバープレートを確認し、万が一そのまま逃走した場合にはのちほど警察に報告できるようにしておいた。

彼の元に駆け寄ると、どうやら彼は無事のようだった。奇跡的にも外傷は一切なく、彼の意識もはっきりしている。それを確認した時、彼をひいたスポーツカーが交差点の向こうで止まり、中にいた運転手がこちらに駆け寄ってきた。

運転手:「だ、大丈夫ですか？本当にすいません」

いかついスポーツカーを運転していた男性は、思っていたよりも人が良さそうだった。

私:「ええ、幸いにも大丈夫そうです」

運転手:「それは良かった〜」

運転手がホッと胸をなでおろした時、親友が突然唸り始めた。

親友:「あ、足が・・・」

彼がそのように述べ、彼の足を確認してみると、足が骨折しているようであり、骨が奇妙に変形していた。そこで私たちは、やはり病院に彼を連れて行こうということになった。そこで夢の場面が変わった。

今朝方はまずそのような夢を見ていた。昨日も確か、中学時代の教師の足の骨が折れる夢を見ていたように思う。その際には、骨を折ったのは私なのだが、今朝方の夢は、第三者がある人物の足の骨を折った。足が折れるということは何を示唆しているのだろうか。しかもそれは私の足ではなく、他者の足である点も何かを示唆しているようだ。この点について少し考えてみようと思う。

また、細かな情景描写としては、スポーツカーの色が黄色であったという点、さらにはスポーツカーには運転手のみならず、もう一人若い男性が乗っていたことも興味深い。そして、運転手は車から降りてこちらに駆け寄ってきたが、左ハンドルの車の右側の助手席に座っていた男性は、車から降りてくることはなかった。こうした細かなシンボルにも一つ一つ意味があるにちがいない。フローニンゲン:2018/12/8(土)06:53

No.1466: A Drop of Delight

Today is now approaching the end. Raindrops are falling from the surface of the window. A sense of absolute fulfillment is always embracing me. Groningen, 21:35, Saturday, 12/8/2018

3495. 内在する賢明さと完全さを示唆する夢

早朝、起床してすぐに、いつものように一日分のお茶を入れた。その時、ティーバッグに付されている言葉を見ると、「人は誰しも賢明に生まれ、かつ完全な存在として生まれる」と書かれていた。確か

に、私たちは誰しも生まれたその時点における最大の賢明さと完全さを持っていると思うが、上記の言葉を表面的に捉えてしまうと、人間は発達していく生き物であるという点がないがしろにされてしまう。賢明さにも完全さにも深さがあることを忘れてはならない。そして、私たちは発達のプロセスにおいては、絶えずその段階における賢明さと完全さを兼ね備えているという点も押さえておく必要があるだろう。そのようなことを考えていると、今朝方に見ていた二つ目の夢について思い出した。それは、どこかティーバッグの言葉と関係していなくもない。

夢の中で私は、あるホテルの廊下に立っていた。どうやらこれから自分の部屋に行くようであった。なぜだかわからないが、私はホテルを二室予約しており、まずは一つの部屋に向かった。このホテルは価格に応じて、同じフロアであっても仕切りが設けられている。私は高価格帯の方に宿泊する予定だったのだが、私が立っているのは仕切りの反対側の廊下だった。そのため、私は仕切りの向こう側に行く必要があり、廊下を歩いていると、一人の見知らぬ男性が声をかけてきた。

見知らぬ男性:「こんにちは。こちら側に宿泊ですか？」

私:「いえ、あちら側です」

見知らぬ男性:「そうですか・・・」

そのような短いやり取りがなされ、私は仕切りの向こう側に出ると、その右手に自分の部屋を見つけた。部屋のナンバープレートはなかったのだが、そこが自分の部屋だと直感的にわかった。

部屋に荷物を降ろし、再び部屋から外に出ようと思ってベッドの方を振り返ると、そこには大学時代のゼミの友人が何人かいた。彼らはベッドの端に腰掛けながら談笑をしている。彼らは私に気づいたようであり、私を手招きし、一緒に談笑しようと持ちかけてきた。彼らに会うのは久しぶりだったから、私も嬉しくなり、近況報告や昔話を楽しもうと思った。

すると、その場にいたゼミの友人のうち、一人の女性の友人が、なぜだか本来の年齢よりも20歳ほど上の53歳になっていることに驚いた。彼女は数年前に結婚したらしく、三歳の女の子がいるそうだ。最初は、自分の子供が可愛いことを嬉しそうに話していたのだが、途中で突然悲しげな顔になって一言つぶやいた。

ゼミの女性の友人:「実は四歳になる男の子もいるんだけど、彼は知的障害で話ができなくて・・・」

その場には、私も含めて、男女数人ほどゼミのメンバーがいたのだが、みんな深刻そうな表情を浮かべて黙っている。しばらく沈黙が続いた後、誰かが声を出そうとした瞬間に、ゼミの友人たちがその場から消え、そこには小中学校時代の親友たちが現れ、彼らが企画した派手なパーティーに私も参加することになった。そのパーティーの終わりと共に夢から覚めた。フローニンゲン:2018/12/8(土)07:17

No.1467: Grace of Fine Weather

Now it is fine weather in Groningen. “Fine weather” might be a trivial event, but I’m feeling its grace. The world is blissful just as it is. Groningen, 11:38, Sunday, 12/9/2018

3496. 小雨降り続ける土曜日に

早朝より小雨が降り続けている。時刻は昼食どきを迎えたが、まだ小雨が止む様子はない。天気予報を確認すると、三時過ぎには一旦小雨が止むようであるから、そのタイミングを見計らって近所のスーパーに買い物に行きたい。明日の午後は、昼食を抜く形で長時間にわたって座禅をしようと思う。そして明日の夕食は、果物などの軽い食事で済ませようと思う。そうしたこともあり、今日の買い物ではそれほど食料を購入する必要はない。パンや果物類、そして飲み物を購入すれば十分だろう。幸いにも、来週からは天気が良い日が続くので、買い物に出かける足取りも軽くなると思う。

今日の午前中はいつもと同じように、作曲理論の学習を行っていた。ディミニッシュコードとsus4コードについてまとめノートを取り終え、午後からも引き続き学習を進めていきたい。

早朝の作曲実践の際に、ディミニッシュコードを曲中で活用しようと思ったのだが、うまくいかなかった。どうも響きが濁ってしまい、不自然な響きとなった。まだどのような箇所でディミニッシュコードを使えばいいのかが掴めていないため、引き続き試行錯誤を続け、自分なりに活用のタイミングを習得していきたいと思う。

これから昼食を摂り、昼食後には、来年の一月末に出版予定の書籍のあとがきを完成させる。再度ドラフトを読み返し、必要な修正を施した上で、共著者の方にそれを送り、まとめて編集者の方に送っ

てもらうようにする。あとがきの執筆が完成すれば、ここからの作業は、二校や三校の細かな修正だけになるだろう。その他に本日行っておきたいのは、オランダで使っている銀行の残高が減ってきたため、日本の銀行から外貨送金を依頼しておこうと思う。

それと、小中学校時代の友人が結婚五周年を迎えたため、何か贈り物を送ろうと思う。彼の結婚式があった時、私はニューヨークに住んでおり、彼の結婚式に参加することができなかった。しかもその時には、何も祝いの品も贈っていなかったことに気づき、今回はちょうど五周年という節目の年なので贈り物を贈呈するにはちょうど良い。高校を卒業してすぐに働きに出た彼には、私が大学に通っている時には随分とお世話になった。

彼の多大な厚意を考えると、それへのお礼にすらならないと思うが、気持ちとして今回贈り物を送ろうと思う。何を贈るかは、数ヶ月前に決めており、あとはそれを注文するだけだ。彼の結婚式の日は、12/21であるから、今日贈り物を注文すれば、その日に郵送指定できるはずだ。今日はそれ以外にすることはないため、午後からは作曲理論の学習と、久しぶりにフォーレに範を求めて一曲ほど作りたい。フローニンゲン：2018/12/8（土）12:27

3497. 土曜日の夜より

時刻は午後の七時半を迎えた。ちょうど今、夕食を摂り終えた。

天気予報の通り、夕方からは雨が止み、そのタイミングを見計らって近所のスーパーに買い物に出かけた。今日も作曲理論をひたすら学ぶ一日であった。

午後にふと、勉強をしていてたまらない幸福感に包まれるというのは、発達理論を学習していた時以来の事かもしれないと思った。確かに、学習には常にある種の幸福感や喜びが伴うが、ここまで強烈な幸福感や喜びを味わえるのは作曲理論の学習以外にないかもしれない。それほどまでに、日々作曲理論を学習することの中に充実感を見出している自分がいる。そうであるがゆえに、今日も相変わらずに、一日のほとんどの時間を作曲理論の学習に費やしていたのだと思う。

明日は予定通り、午後から長時間に及ぶ座禅を行う。長時間と言っても五時間ほどの時間である。ここ最近そうした長さの時間を座る際には、ほぼ必ず知覚変容が起こり、様々な気づきや発見が得

られる。それらは特殊な意識状態の中で得られるものであるから、通常の意識状態を通じて解釈すると、荒唐無稽に思えるかもしれない。だが、私たちの通常の意識状態には知覚されえぬ認識世界が存在していることは忘れてはならないだろうし、座禅瞑想などを通じて意識の状態が変容すれば、そうした認識世界にアクセスできることも忘れてはならない。

先ほど夕食を摂りながら、芸術教育を考える際に、ないしは芸術的知性の発達を考える際に、霊性は不可欠な要素であると思った。なんとかしてその観点を真正面から取り上げるような研究をしていきたい。そのためには、諸々の領域の知見を組み合わせていくことが必要であろうし、芸術教育に関する主要な論点と霊性を架橋していく発想が求められるだろう。そうしたテーマであれば、何か論文を執筆するに値するという考えが芽生えてくる。このテーマを温め続け、少しずつ考えや方向性を洗練させていこうと思う。

今日は夕方に、ラヴェルの楽譜を二冊購入した。以前から購入しようと思っていた楽譜を本日ようやく購入することができた。フランスを代表する作曲家は数知れないが、今のところフォーレやドビュッシー、さらにはエマニュエル・シャブリエの楽譜はすでに所有していた。今、書斎の中にはラヴェルのピアノ曲が鳴り響いていて、それを聞くたびに、昨年の冬に訪れたオッテロー村の記憶が蘇ってくる。その時私は、デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園とクレラー・ミュラー美術館を訪れるために、オッテロー村のホテルに宿泊していた。そのホテルの自室でラヴェルのピアノ曲をずっと聴いていたことを思い出す。

とても些細なことだが、ホテル近くのスーパーで夕食のサラダを購入した時、そのスーパーには無料のプラスチック製のフォークやスプーンがなく、ホテルの自室でラヴェルの音楽を聴きながら、素手でサラダを食べていたのを思い出した。二年前の夏にスイスのニューシャテルとパリに旅行に出かけた際に、オーダーメードの箸を携帯していたように、今後の旅行には箸を持っていく必要があるかもしれない、とサラダを素手で食べながらふと考えていたことも思い出す。

今回、そうした思い出の詰まった曲のいくつかが収められた楽譜を購入することができた。二冊の楽譜が到着するのはクリスマス頃になるだろう。それは私にとって嬉しいクリスマスプレゼントになる。ここからはしばらく楽譜の購入を控えたいと思うが、ロシアの作曲家の作品についても関心があるため、来年をめどにロシアの作曲家の楽譜も購入したい。フローニンゲン：2018/12/8（土）19:40

3498. 中世の城に宿泊する夢

今朝はいつもよりもゆっくりと、午前七時に起床した。昨夜就寝前は、雨滴が窓ガラスを伝って落ちていくのが見えていた。今朝は雨が降っておらず、近くから小鳥の鳴き声が聞こえてくる。今日は曇りがちな一日となり、時折小雨が降るようだ。雨が降っていない今の静寂な世界を少々味わおうと思う。

昨夜、絶対的な充実感が絶えず自分を包んでいることに改めて気づいた。今日もそうした感覚に包まれながら、一日を過ごしていくことができるだろう。午前中の活動を終えたら、今日は午後から接心を行いたい。その際には、ラヴェルのピアノ曲を聴こうと思う。

普段と同じように、今朝方の夢について思い出している。今朝はいくつかの夢を見ていたのだが、記憶が断片的なものになりつつある。覚えている範囲のことを書き留めたい。

夢の中で私は、中世の城のような建物の中にいた。そこは見学用に開放されているのではなく、中を改装して宿泊施設として一般利用が可能になっている。私はそこの宿泊客の一人だった。

建物の中にはいくつかの螺旋階段があり、何箇所からか上下の階にアクセスすることができる。私は一番上の階に宿泊しており、階段を下っていると、建物の中が少々暗いように思えた。明かりが灯されておらず、建物内を歩く人の気配は感じるのだが、その姿は一切見えない。すると、少し遠くの方から、小中高時代の幼なじみの女性の友人(MH)が私に声をかけてきた。

友人:「夕食もう食べた？」

私:「いや、まだだよ。そういえばお腹が空いたなぁ」

友人:「二階のレストランでビュッフェ形式の食事ができるよ」

私:「そうみたいね。でもさっき見たら、もうあんまり食べ物が残ってなかったなぁ」

友人:「だったら私が何か作ってあげるよ。何が食べたい？」

私:「ありがとう！う〜ん、ステーキとピザかな」

友人:「了解。じゃあ、城の中のどこかで待っててね！」

友人はそのように述べると、料理をしにレストランの厨房に向かった。それにしても、ステーキとピザという組み合わせを選んだのはなぜなのだろうか。それについて考えていると、先ほどすれ違った別の友人二人がそれぞれステーキとピザを皿に乗せて彼らの部屋に向かっているのを目撃したからである。二人の友人に声をかけると、レストランで出されているステーキとピザはかなり美味しいとのことであった。

友人に食事の依頼をした後、私は本来の用事が何であったかを忘れ、もう一度最上階の自分の部屋に戻ることにした。部屋に戻ってみると、そこには別の友人(HH)がいて、突然私に声をかけてきた。

別の友人:「七時から勉強会が始まるよ。早くその支度をしないと」

私:「勉強会？どこで？」

別の友人:「三階の大広間でさ」

私:「ちょっとシャワーを浴びたいなぁ。あと五分しかないけど間に合うかなぁ」

私は急遽勉強会に参加することになり、急いでシャワーを浴びることにした。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/9(日)08:04

No.1468: A Passing Night

Sunday is now approaching the end, and Monday will come. I'm not so sure of how many times I can spend this kind of night in my life, but I hope it to come again and again. Groningen, 21:39, Sunday, 12/9/2018

3499. 丘の上のスピーチと不思議な赤ちゃん

時刻は午前八時を迎えた。空がダークブルーに変わりつつあるのが見える。ここ最近は早朝から雨が降っていたり、空が雲で覆われていることが多かったため、日の出の時間がよりいっそう遅く感じられていた。今日も確かに快晴ではないが、雲の量が少ないためか、この時間帯でも空がダークブルーに変わりつつある姿を眺めることができる。

先ほどは、今朝方の夢の一つを思い出していた。実はその後にもいくつかの夢が続いていた。一つ一つの夢を順番に思い出しながら、想起できる限りのことを書き留めておきたい。このように、想起できる範囲のことを可能な限り全て書き留めておくことが、夢の想起力を高めることにつながっていると実感している。

二つ目の夢の中で私は、ある開放的な丘の上にいた。その場所はアメリカのどこかの町の郊外のようだった。その丘はある大学が所有しているものであり、丘の頂上から眺める景色はとても素晴らしい。私は丘の頂上に登り、そこから街全体を眺めた。

どこからか、優しい風が吹いてくる。空を見上げると、太陽が輝いている。

太陽の光を浴び、穏やかな風を感じながら、私はぼんやりと街の風景を眺めていた。すると、丘の上に多くの学生がぞろぞろと集まり始めている姿を見た。

私のそばを一人のアメリカ人の女子学生が通ったので話を聞いてみると、何やらこれから卒業式の予行練習があるらしい。どのような式なのか気になったため、私も予行練習に参加することにした。

丘の上に、無数の学生が円を描いて立っている。円の中心には、四人の学生が等間隔で立っており、彼らの並び方も小さな円の形をしていた。そこから同心円状に、数多くの学生が無数の円を作っていた。私は円の中心に行き、四人の学生が何をしているのかを見に行った。彼ら四人は学生の代表らしく、そのうちの一人がこれからスピーチをするらしい。彼女はゆっくりとスピーチを始めた。彼女のスピーチはとても感動的であり、特にスピーチを締めくくる部分は私の心を打った。周りを見ると、同心円状に並んでいる数多くの学生たちも、感動の涙を流していた。スピーチが終わり、丘の上に再び優しい風が吹いた。

人生の出発と終わりに関する話。彼女のスピーチは、それをテーマにしたものだったように思う。

そこで夢の場面が変わった。三つ目の夢の場面では、私は一つ目の夢の場面で出てきた城の中にあるレストランにいた。

レストランの丸テーブルの一つの席に座っていると、赤ちゃんを抱えた男性が私の隣に座った。彼はオランダ人かドイツ人であり、赤ちゃんの父親のようだった。

赤ちゃんの父親:「ここいいですか？」

私:「どうぞどうぞ。赤ちゃん可愛いですね～」

赤ちゃんの父親:「ありがとうございます。この間生まれたばかりなんです」

私は赤ちゃんを抱っこさせてもらい、料理が運ばれてくるまで男性と会話を楽しんでいた。

私:「あれっ、この赤ちゃん・・・」

赤ちゃんの父親:「どうしましたか？」

私:「いや、先ほどまで読んでいた歴史の教科書の写真で見たような・・・」

赤ちゃんの父親:「えっ？」

私:「ほら、やっぱり！」

私はそのように述べると、何度も繰り返し読まれたボロボロの歴史の教科書の真ん中あたりのページを広げ、それを赤ちゃんの父親に見せた。

赤ちゃんの父親:「なんて書いてあるんですか？」

私:「この赤ちゃんは特殊な体質を持っているようです。一見すると免疫疾患か何かに思えるのですが、それは病気ではなく、実際は途轍もない能力のようです」

私は赤ちゃんの父親にそのように述べ、再び抱きかかえている赤ちゃんの顔を見た。男の子のその赤ちゃんは、そっと私に微笑んだ。フローニンゲン：2018/12/9（日）08:26

No.1469: Time for a Celestial Dragon to Rise

It suddenly started to rain half an hour ago, but now it stops. I want to celebrate the beginning of a new day. Groningen, 07:48, Monday, 12/10/2018

3500. 父に似た歴史上の人物と幸福の香り

時刻は八時半を迎えた。辺りは随分と明るくなった。日曜日の早朝の空の上を、薄い雲がゆっくりと動いていくのが見える。雲が動いているのが目に見えるので、それはゆっくりというよりも、幾分早い速度だと言えるかもしれない。

今、ちょうど一日分のコーヒーを作り終えた。今日は午後から接心をするため、コーヒーを飲むのは午前中の一杯だけにしようと思う。

今朝方の夢について先ほどまで振り返っていたが、あと二つほど別の夢を見ていたことを思い出した。今朝方は随分と多くの夢を見ていたものである。

夢の中で私は、ある歴史上の人物の記念館にいた。両親と共にそこへ訪れていた。その歴史上の人物は日本人なのだが、長く欧米で生活をすることによって、もはや風貌が日本人のようには見えない。風貌だけがわかり、名前や何をした人なのかがわからなかったため、この記念館を訪れることによって、少しでもその人物について知れたらと思った。

記念館は、まさにその人物が住んでいた家を公開したものである。その人物の家は、完全に欧米風の作りになっていた。

両親と私は、その人物が使っていた書斎に向かった。書斎の中に入ると、左手に立派な本棚があることに気づいた。私は、どのような書物がそこに置かれているのかを確認した。すると、日本語の書籍はほとんどなく、フランス語とドイツ語の書籍が中心であり、英語の書籍も少々置かれていた。

背表紙を眺めてみても、フランス語やドイツ語のタイトルのため、それらの書籍がどのような内容のものなのかはわからなかった。少しばかり本棚を眺めた後、書斎の奥に向かった。

書斎の机は縦長の窓に面していて、そこから外の景色をいつでも眺めることができる。書斎には、窓から差し込む太陽の光で溢れていた。書斎に置かれている本棚も立派なものだったが、それ以上に机も立派であった。

父:「この机は6,500万円ぐらいはするな」

母:「えっ？」

私:「6,500万円かぁ、結構な値段だね」

私はそのように述べながら、手で机をさすった。すると突然、父が机の上にかけられたカバーを勢いよく外した。カバーの外された机の上に視線を落とすと、そこにはヨーロッパ言語で書かれた新聞の切り抜きや何枚かの写真が挟まってあった。

私:「あれっ、この写真お父さんに似てない？（笑）」

母:「本当だぁ（笑）」

それは、その歴史上の人物がアルプスかどこかの山を登った時の写真だった。燦然と輝く太陽を背景にし、その人物が一人で満面の笑みを浮かべている。彼の全身は防寒着で包まれており、頭に暖かそうなニット帽のようなものを被っている。その自分の風貌と表情がどこか父に見えた。

母と私は父を少々からかったが、三人ともその人物が父ではないことを百も承知であった。ただ、どこかその人物は父を思わせるものをいくつも持っていたことは確かだった。

父:「じゃあ、そろそろ行くか」

父がそのように述べると、私たち三人はゆっくりとその書斎を後にした。その書斎には、どこか幸福の香りが染み付いていた。

© YOHEI KATO 2018

きっとその人物の人生は幸福に包まれたものだったのだろう、と私は思った。フローニンゲン：2018/12/9（日）08:49

No.1470: A Fragment of Sunset

Although it had sometimes drizzled today, now it stops. I can see a fragment of the glow of the sunset. Groningen, 16:17, Monday, 12/10/2018